

直江、和歌森、堀、関、神島の諸氏、それに先生も加はれて、終戦後の中国の学界の動向、比較民俗学に於ける日本民俗学の地位、日本民俗学への要望等を語り合つた」とある。その後、エーデルは日本に移住し、この雑誌の出版を継続しており⁽⁸⁴⁾、柳田文庫にも多数所蔵されている。

4 直江広治の中国経験と日本民俗学

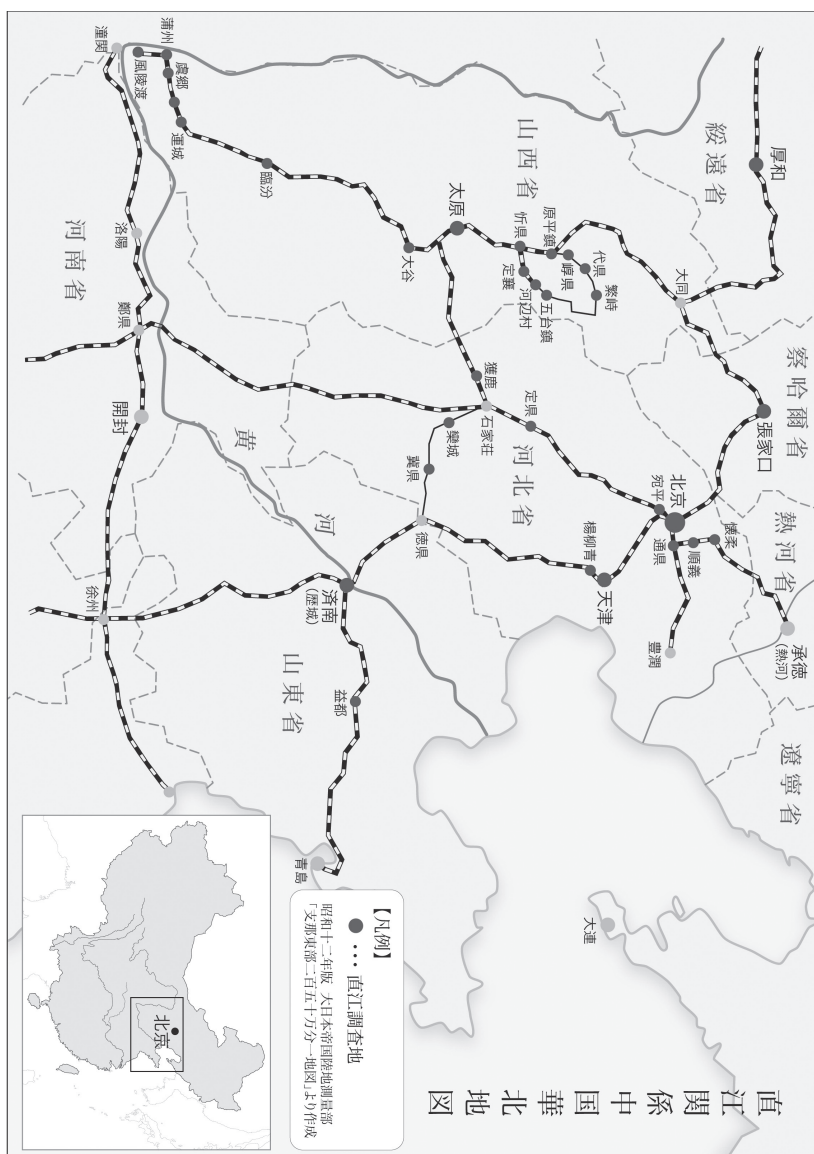
直江広治は若い世代に属し、高等師範学校時代に民俗学と出会った頃、日本民俗学の全国的な組織は既に確立され、山村調査も展開されていた。民間伝承の会に入会したとき、海村調査が打ち切られ、国内の大規模な民俗学活動が次第に難しくなりつつあった。そのために太田陸郎や大間知篤三のように初期日本民俗学の組織化や民俗研究に大きく貢献することはできなかった。しかし、日本での活動を中断して中国に赴いた太田と大間知と異なり、直江の場合、中国は早くから研究対象となっている。

日中戦争の衝撃によって中国研究を志した直江は、専攻である東洋史より民俗学のアプローチを選んだ。柳田門下で受けた民俗学の教育と訓練はその意味で中国研究のための準備という側面を持っている。その自然な成行きとして、大学卒業直後、彼は北京に渡ったのである。

北京では早々、彼は日本人による民俗研究同好組織民風会の活動に積極的に参加し、満鉄の調査員山本斌との関係で、華北農村慣行調査に便乗する形で調査を展開しており、資源科学研究所による山西調査の一員にもなっていた。明確に判断できた直江の調査地を整理する結果は図16である。直江の主要調査地はほぼ鉄道沿線に限定し、さらに居住地である北京周辺以外、満鉄の慣行調査の主要地域（河北省、山東省）や山西調査団の行動範囲（山西省）に大きく依存していることがわかる。

戦前直江の中国研究には、太田陸郎のような壮大な文化史的仮設、或いは大間知篤三のような民俗学・民族学に

图 16 直江広治調査関係中国華北地図



関する理論的な論考は見られず、中国語の能力を生かした口頭伝承に関する内容が中心であった。中国民俗学はその発端である歌謡収集から、歌謡、神話、伝説、昔話、謎などの口頭伝承（のち「民間文芸」という）が中心であった。直江は大学在学中、既に中国民俗学の成果に注意を払っており、その伝統に影響を受けた可能性が大きい。彼の卒業論文は「中国民間説話の民俗学的研究」であり、一九四二年九月輔仁大学で「日本民俗学」を開講すると同時に真っ先に翻訳したのも『昔話採集手帖』（柳田国男・関敬吾編、一九三六年八月）であった。口頭伝承に対する注目は首尾一貫していたといえよう。しかし戦前発表された文章は事例報告が多く、まだ系統的な研究という段階には達していない。

直江の中国経験の意味は、なにより彼の活発な活動にあると見るべきである。太田が「現地レポーター」、大間知が「現地組織者」とすれば、直江は若さと情熱を持つ「現地エージェント」といえる。

彼にとって中国と民俗学は最大のテーマであり、中国に向かって日本民俗学を出張することを自分の任務としていた。中国に到着早々、『民間伝承』に会員通信を寄せ、以降、たびたび会員通信を寄せる（表24参照）以外、頻繁に柳田や橋浦に書簡を寄せている（「直江書簡」）。その中で、彼は北京における学界の動向、特に民風会を中心とした民俗学活動の状況、そして自分の近況を詳細に伝えている。一方的な情報の伝達ではなく、これらの書簡は、時には柳田や橋浦への依頼状であり、時には紹介状であり、さらに後述するように、日本民俗学からの要望に対する報告書でもあった。

彼は日本民俗学の普及に真剣に取り組み、種々の制約で直接的な効果は弱かったものの、一九四〇年代に中国人学生を対象に「日本民俗学」という講座を持ったことが画期的なことであった。また戦後王汝瀾という日本民俗学の積極的な紹介者が生まれたことの背後に、戦時下、輔仁大学における直江の民俗学活動の影響があったと思われる。

北京では方々からみれば、直江は正統な日本民俗学の代表であった。満鉄の華北農村調査の関係者は、彼を經由

表24 『民間伝承』直江広治関係内容（1941～1944年）

刊行年月	号数	内 容	備考
1941年8月	6 - 11	連日酷暑、昨夜雷雨、支那人雨に弱い、夏休み調査予定	会報届く (九月十三日 益都にて)
12月	7 - 3	民風会の研究会、折口信夫来燕、北京近郊調査、大間知中心の同好会と連絡する意欲	
1942年9月	8 - 5	山西調査終了、石田英一郎とラーマンを訪れる。エーデル、細井次郎近況、北京の伝説 25 回休止。	
1943年1月	8 - 9	「批評紹介」で「民俗学誌」創刊の紹介（関敬吾）	
10月	9 - 5	9月から支那語で日本民俗学講義、輔仁生活に昔話採集手帖を翻訳、中国の民譚を収集したい。	
11月	9 - 6・7	「学会消息」に「東方民俗研究会」の紹介	
12月	9 - 8	「学会消息」に「北京 東方民俗研究会の成立」の報告	
1944年3月	10 - 1	山東益都調査、満洲城、回教徒部落、伝説・農諺・童謡、土地廟、高粱の刈り取り、明日中秋節	
7月	10 - 5	北京大会で大喜び、周作人のこと（方言調査に興味、「蝸牛考」「日本の祭」の翻訳を考案するが困難）	

出典：『民間伝承』各号より作成。

して日本民俗学の成果を吸収しようとしていた。山西調査では、それを理由に彼の参加が許可され、それに合わせてもともと設定されていたなかった「民俗学的調査研究（民間伝承）」という調査項目が追加された。輔仁大学では彼を講師とする「日本民俗学」という科目が新たに開設され、彼の教育活動の主要な部分が「民俗学」であると認識されている。

一方、直江も日本民俗学に関心を持つ者を、積極的に東京の柳田へ紹介していた。満鉄の調査員山本斌、輔仁大学の細井次郎、エーデルなどの人物が彼の仲介で日本民俗学と直接関係を持つようになった。そして北京が華北占領地の文化的、交通的中心である関係もあり、石田英一郎、大間知篤三、折口信夫、早川孝太郎など日本民俗学において重要な地位にある者が相次いでこの地を訪れたが、いつも直江の迎えを受け民俗学に関する情報交換を行っていた。直江の努力で、後述するように、北京が、日本民俗学が内地以外へと発展する構想及び実践活動において重要な場所となったのである。